

～食品に含まれる放射性物質の食品健康影響評価について～  
「累積線量 100mSV」に対する、NO！放射能「江東こども守る会」の見解

平成 23 年 8 月 23 日

「生涯 100 ミリシーベルト」。

7 月 26 日、食品安全委員会が示した生涯の累積被曝線量の限度値です。

外部被曝と内部被曝を合わせたこの値。

これは果たして多いのか、それとも少ないのか？

ぜったいに安全だと言える値なのか？

この値に則って、政府が私たちの環境を、食を守ってくれれば、私たちはふたたび安心して暮らすことができるのか？

それは、誰にもわからないことです。

なぜなら、累積 100 ミリシーベルト以上であれば健康影響が見出されますが(しかもこれは、事故時などに一度に浴びる“急性被曝”の場合。現在のように長時間かけて低い線量をじわじわと浴び続ける低線量被曝については未知数)、それ未満の健康影響については、学問的に証明されていないからです。言い換えれば、放射線被曝量に「安全」はない。これ以下であれば、「健康に影響がない」とは言い切れないのです。

生涯累積 100 ミリシーベルトとは、あくまで、これ以上であれば「影響が出ると考えられる」という値。しかも、これは成人を軸にして考えられたもの。小児に関しては、チェルノブイリ原発事故の事後調査から、甲状腺ガンや白血病のリスクがより高まることがわかっています。

さらに懸念されるのは、この決定には、私たちにとって重要ないくつかの研究結果が全く考慮されていないことです。

たとえば、元放射線医学総合研究所主任研究官崎山比佐子氏が指摘する「低線量内部被ばく」による健康障害（甲状腺がん以外のがんとその他晩発障害）に関する論文、今年中に岩波書店から翻訳が刊行されるニューヨーク科学アカデミーによる最新の報告書『チェルノブイリ—大惨事が人びとと環境におよぼした影響 Chernobyl: Consequences of the Catastrophe for People and the Environment』(2009 年)

(<http://chernobyl25.blogspot.com/>)や核戦争防止国際医師会議 (IPPNW) ドイツ支部がまとめた調査報告『チェルノブイリ事故の人体への影響 Health Effects of Chernobyl 25 years after the reactor catastrophe』(2010 年)

(<http://peacephilosophy.blogspot.com/2011/05/ipnnw-health-effects-of-chernobyl.html>)

……これらには、25 年後のチェルノブイリ地域における“こども”の健康障害の事例が多数報告されているのです。

そして、食品安全委員会は低線量の放射線被曝による健康影響に関しては、疫学データにおいて統計学的有意を示していない」との見解を示していますが、有意ではないからといって、健康影響がないとは言えないということは、実は疫学の基本です。事実、バンダジェフスキー『人体に入った放射性セシウムの医学的・生物学的影響』(久保田護訳)では、

チェルノブイリ地域の疫学調査・病理学（解剖学）の結果、「子どもの体内に蓄積されるセシウム 137 が、体重 1 キログラムあたり 50 ベクレルに達すると、生命維持に必須の諸器官（循環器系、神経系、内分泌系、免疫系）、ならびに、腎臓、肝臓、眼、その他の臓器に病理的変化があらわれることが明らかになっている」とされています。ヨーロッパにおいても、チェルノブイリの事故後、IPPNW は一万人以上の重篤な奇形が発生し、IAEA でさえも 10 万から 20 万件の流産が引き起こされたと結論づけていますが、当然こういった事実も無視されています。

こどもは、そして妊婦は、成人よりも確実に放射線に関する感受性が高い。私たちが、何より訴えたいことはここです。

もし、あと数ヶ月で完全に事故が終結し、さらに食物の汚染が短期間の内に終わり、土壌はすべて除染され、なおかつこの先ぜったいに、全国の原発が事故を起こさずにいると確認できるのなら、現在の規制値でも問題ないのかもしれない。

しかしながら、福島原発の事故は、いまでも収束していません。いまでも、放射性物質は漏れ続けています。こどもたちは、これからあと数十年も、この原発事故で汚染された中で暮らしていかなければならない。いま、私たちがある意味では楽観的に決定した累積被曝線量「100 ミリシーベルト」は、未来ある彼らにとっては決して安全とは言い難い値です。

何の罪もないのに、このような状況に生まれ、成長しなければならなくなったこどもたちに、私たちができるせめてものこと。それは、こどもたちをできる限り放射能から守ること。せめて、こどもたちが口にするものだけでも、放射能汚染されていないものを選ぶこと。チェルノブイリ原発事故でのヨーロッパ諸国の対応を思い出してください。自国のこどもたちを守るという確固たる信念の元に、国をあげてより厳しい基準をこどもと妊婦に設定したことを、私たちは学ぶべきなのです。いま私たちができること。それは、より影響を受けやすいこどもたちに対する、あらたな、より安全と思われる基準を設定し直すことだと、私たちは考えます。